

ガーシュウインの「ラプソディ・イン・ブルー」、テレビの「のだめカンタービレ」でメロディーの刷り込み、アタマの中で簡単にスイッチ・オン、いつでもリフレイン状態。クラシックにジャズやブルースをプラス、晴れない気持ち、気だるさ、メランコリーを反映、ドロドロドププリ。そして、斜に構えたスタンスが粹、ファージー・はぐらかし、快活な軽さ。的確な雰囲気作りとスムーズな進行を期待、うまく行かぬと一抹の不安感。演奏家にとって、いつもと違う変化球、別な資質が必要、勝手に大変と推察。

少しのチグハグ曖昧さも何のその、一致団結、最後には結果オーライ。会場全体がスイングに酔って、グレン・ミラー・ワールド。リノリフェイズ、そうありたいと願う望むスタイル。ピアニスト、E音楽の四角四面さからの脱却、違和感の渦の中、冒険への踏み出し。逡巡気味のオーケストラに対し、率先して模範を提示、安心しての追従。危なげなし、音楽性の裏打ち、オーケストラ全体を巻き込む、信頼の説得力、プロとしての自負。オリジナルのアプローチ、譲れぬ一線、底なしジャズ・モードには非ず、真摯さの残り香、ノーブルさ。吟味・消化しての明確さ、転倒ジャンプの懸念不要、自信満々の茶目っ気、面白み満面。

ガーシュウインさん、大衆に迎合した人懐っこさ、エモーショナルな訴え、ラフマニノフさんとの類似。今日の演奏、フィーリング合わせでなく明快な主張、雄弁説得力。作曲家には、プーランクさん様な、洒落たジャズ・イデオムの軽快なノリや、物憂げな塞ぎの蠢きはないが。演奏家、独特なパッセージの弾き分け、个性的色付け、優等生のジャズ・ブルース。真摯な取り組み、楽しそう嬉しそう、新たな一面を見る、着実に進化のスガタ。

「ラプソディ・イン・ブルー」、父親のレコードが出発点、作曲者のピアノだったっけ、歴史的録音とかの言葉に弱い頃。25年ほど前、ラベック姉妹のライブを横浜で聴く、ペトルーシュカも一緒、その5年後富山で「セカンド・ラプソディー」を、いずれも、カティア姉さんのノリのよさに唾然とした思い出。「のだめカンタービレ」のコミック本は読んだことなし、ビックコミック・オリジナルの「アレルヤ(Hallelujah)」が好き。(2008.2.4)

---

バーンスタイン：キャンデード序曲

ガーシュウイン：ラプソディ・イン・ブルー

【オーケストラ】富山シティフィルハーモニー管弦楽団

【指揮者】土井 浩

---